

# 琴の音

樋口一葉

青空文庫



## 上

空に月日のかはる光りなく、春さく花のゝどけきは浮世萬人おなじかるべきを、梢のあらし此處にばかり騒ぐか、あはれ罪なき身ひとつを枝葉ちりちりの不運に、むごや十四年が春秋を雨にうたれ風にふかれ、わづかに残る玉の緒の我れとくやしき境界にたゞよふ子あり。

母は此子が四つの歳、みづから家を出で、我れ一人苦をのがれんとにもあらねど、かたむきゆく家運のかへし難きを知る實家の親々が、斯く甲斐性なき男に一生をまかせて、涙のうちに送らせん

事いとほし、乳房の別れの愁らしとても、子は只一人なるぞかしと、分別らしき異見を女子ごゝろの淺ましき耳にさゝやかれて、良人には心の残るべきやうもあらざりしかど、我が子の可愛きに引かれては、此子の親なる人をかゝる中に捨てゝ、我が立さらん後はと、流石に血をなく思ひもありしが、親々の意見は漸く義理の様にからまりて、弱き心のをしきらんに難く、霜ばしら今たふれぬべきを知りつゝ、家も此子も、此子の親をも捨てゝ出でぬ。父は一人ゆきたることもあり、此子を抱きて行きたることもあり、これを突きつけて戻りたることもあり、我れは此まゝ朽はてぬとも、せめては此子を世に出したきに、いかにもして今一たび戻りくれよ、長くとは非ず今五年がほど、これに物ごゝろのつきぬ

べきまでと、頼みつすかしたつ歎げきけるが、さりととも子故に闇なるは母親の常ぞ、やがては戀しさに堪えがたく、我れと佗して歸りぬべきものと覺束なきを頼みて、十五日は如何に、二十日は如何に、今日こそは明日こそはと待つ日空しく過ぎて、はては尋ね行きたりとして、面を合はする事もなく、乳母にや出けん、人の妻にや成りけん、百年の契りは誠に空しくなりぬ。

斯くて半年を経たりし後は、父もむかしの父に非ずなりぬ、見かぎりて出にし妻を、あはれ賢こしと世の人ほめものにして、打すてられし親子の身に哀れをかくる人は少なかりき、夫れも道理、胸にたゝまるもやゝの雲の、しばし晴るゝはこれぞとばかり、飲むほどに酔ふほどに、人の本性はいよいよ暗くなりて、つのも

ゆく我意の何處にか容れらるべき、其年の師走には親子が身二つを包むものも無く、ましてや雨露をしのがん軒もなく成りぬ、されども父の有けるほどは、頼む大樹のかけと仰ぎて、よしや木ちんの宿に蒲團はうすくとも、温かき情の身にしみし事もありしを、夫すら十歳と指をるほどもなく、一とせ何やらの祝ひに或る富ものも豪ちの、かぐみを※いていざと並べし振舞の酒を、うまし天の美祿、これを槩りに我れも極樂へと心にや定めけん、飢へたる腹にしたゝかものして、歸るや御濠の松の下かげ、世にあさましき終りを爲しける後は、來よかし此處へ、我れ拾ひあげて人にせんと招くもなければ、我れから願ひて人に成らん望みもなく、はじめは浮世に父母ある人うらやましく、我れも一人は母ありけり、今

は何處に如何なることをしてと、そゞろに戀しきこともありしが、父が終りの悲しきを見るにも、我が渡邊の家の末をおもふにも、母が處業しわざは惡魔に似たりときへ恨まれける。

父は無きか、母は如何にと問はるゝ毎に、袖のぬれしは昔しなりけり、浮世に情なく人の心に誠なきものと思ひさだめてよりは、なまなか生中あはれをかくる人も、我れを嘲けるやうに覺えて面にくし、いでや、つらからば一筋につらかれ、とてもかくても憂身のはてはとねぢけゆく心に、神も佛も敵とおもへば、恨みは誰れに訴へん、漸々尋常なみならぬ道に尋常なみならぬ思ひを馳せけり。

おどろに亂れし髪のひまより、人を射るやうなる眼のきらきらと光るほかは、垢あかにまみれし面かげの、何處にはいかならん好き處

ありとも、凡人の目に好しと見ゆべきかは、恐ろしく氣味悪く油断ならぬ小僧と指さゝるゝはては、警察にさへ睨まれて、此處の祭禮かしの縁日、人山きづくが中に忌はしき疑うたがひを受けつ、口をしや剪すり兒よ盜人と萬人にわめかれし事もありき。

人の眼はくもりたるものにて、耳は千里の外までも聞くか、あやまり傳へたる事は再度きえず、渡邊の金吾は誠ものの盜賊に成りぬ、やがては明治の何と肩がきをつくべきほど、おそろしがらるゝ身かへりて恐ろしく、此處を離れて知らぬ土地に走らんと思ひたる事もあり、恨みに堪えかねては死なばやと思ひたる事もあり、幾度水のおもてに臨みて、これを限りと眺めたる事もありしが、易きに似て難きものは死なりけり。



捨てはてし身にも猶衣食のわづらひあれば、晝は 處となくさまよひて何となく使はれ、夜は一處不住の宿りに、かくても夢は結びつゝ、日一日とたゞよひにたゞよひて、過しゆくほどに、脊たけと共にのびゆくは、ねじけたる心なるべし。

## 下

御行の松に吹かぜ音さびて、根岸田甫におくて晩稻かりほす頃、あのあたりに森江しづと呼ぶ女あるじの家を、うさんらしき乞食小僧の目にかけてつゝ、怪しげなる素振あるよし、婢女ども氣味わるがりて唄き合ひしが、門の扉の明くれに用心するまでもなく、垣に枝

だれし柿の實ひとつ、事もなくして一月あまりも過ぎぬるに、何時となく忘れて噂も出ず成しが、主の女が敏き耳には、少しあやしと聞かるゝ事あり、秋雨しとくゝと降りて物あはれなる夜、ともし火のもとに獨り手馴れの琴を友として、あはれに淋しき調べを弄びつゝ、上野の森に聞えいづる鐘の、さりとは更けぬるかなと、さしおきて聞けば、軒ばを傳ふ雨しだりのほかに、梢をゆるる秋風の外に、物のけはいの聞ゆる様なること度かさなりぬ。

軒ばに高き一もと松、誰れに操のひとりずみ獨ひ 栖ずみぞと問はゞ、斯道これにと

答へんつま琴の優しき音色に一身を投げ入れて、思ひをひそめしは幾とせか取る年は十九、姿は風にもたへぬ柳の糸の、細々と弱げなれども、爪箱とりて居ずまるを改たむる時は、塵のうきよの

紛みだれ雜も何ぞ、松風かよふ糸の上には、山姫きたりて手やそふらん、  
 夢も現も此うちにとほ、笑みて、雨にも風にも、はた、めく雷電  
 にも、悠然として餘念なし。

頃は神無月はつ霜この頃ぞ降りて、紅葉の上に照る月の、誰が砥  
 にかけて磨きいだしけん、老女が化粧のたとへは凄し、天下一面  
 くもりなき影の、照らすらん大厦も高樓も、破屋わらやの板間の犬の臥  
 床も、さては埋もれ水人に捨てられて、蘆のかれ葉に霜のみ冴ゆ  
 る古宅の池も、笕のおとなひ心細き山した庵も、田のもの案山子  
 も小溝の流れも、須磨も明石も松島も、ひとつ光りのうちに包み  
 て、清きは清きにしたがひ、濁れるは濁れるまに、八面玲瓏  
 一點無私のおもかげに添ひて、澄のぼる琴のね何處までゆくらん、

うつくしく面白く、清く尊く、さながら天上の樂にも似たりけり。お静が琴のねは此月此日うき世に人一人生みぬ、春秋十四年雨つゆに打たれて、ねぢけゆく心は巖のやうにかたく、射る矢も此處にたちがたき身の、果は臭骸を野山にさらして、父が末路の哀れやまなぶらん、さらずば惡名を路傍につたへて、腰に鎖のあさましき世や送るらん、さても心の奥にひそまりし優しさは、三更月下の琴聲に和して、こぼれ初めぬる涙、露の玉か、玉ならば趙氏が城のいくつにも替へがたし、戀か情か、其人の姿をも知らざりき、わづかに洩れ出る柴がきごしの聲に、うれしといふ事も覺えぬ、恥かしさも知りぬ、かねては惡魔と恨らみたる母の懐かしさへ身にしみて、金吾は今さら此世のすて難きを知りぬ、月はいよ

く、冴ゆる夜の垣の菊の香たもとに満ちて、吹くや夜あらし心の  
雲を拂らへば、又かきたつる琴のねの、あはれ百年の友とや成る  
らん、百年の悶へをや残すらん、金吾はこれより百花爛の世に  
いでぬ



# 青空文庫情報

底本：「文學界 第十二號」文學界雜誌社

1893（明治26）年12月30日発行

初出：「文學界 第十二號」文學界雜誌社

1893（明治26）年12月30日発行

※底本掲載時の署名は、「一葉」です。

※変体仮名は、通常の仮名で入力しました。

入力：万波通彦

校正：Juki

2013年11月8日作成

2013年12月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。



# 琴の音

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>